

射水

射水神社社報 平成18年1月発行

第5号



年頭挨拶

宮司 松本正昭

皇紀二千六百六十六年平成十八年の初春を迎え、新年を寿ぎ賀詞を申し上げます。年月の経つのは誠に早いものでございます。昨年は当神社鎮座千三百三十年・遷座百三十年祭の準備等で忙しい日々でありました。お陰をもちまして無事斎行し終えたことは、大神様の大御威はもとより、奉賛会各位を始め崇敬各位の奉賛のお陰と深く感謝申しあげる次第でありますと共に、感慨無量の慶びでありました。

しかしながら、故渡辺奉賛会長の式年大祭直前の入院、そして思いもよらぬ訃報に接しましたことは、誠に無念きわまりなく悪夢としか申しあげようも御座いません。生前、神社に敬神の誠を捧げ戴きましたことに深く感謝申しあげますと共に、哀悼の念を捧げ、心よりご冥福をお祈り申しあげる次第であります。

この上は、今は亡き渡辺会長の意を完し、記念事業の完遂に新会長綿貫武様始め役員各位と共に尽力し、天佑神助の光被を仰ぎ奉り度く願ってやまないのではありません。奉賛会各位・崇敬者各位の更なる篤志を賜りますよう、お願い申し上げます。

渡辺奉賛会長逝去

平成十七年十月二十一日午前、射水神社奉賛会長渡辺辰男氏が帰幽いたしました。渡辺辰男氏は平成十年より奉賛会長として活躍され、平成十七年に執り行われました式年大祭、そして近年の奉賛会組織に対する重要施策につきましても、それぞれの意見を取り入れる調整力と、信念をまげぬ実行力をもって活躍されました。また誰しもが認める明るい人柄は、社務運営においても重要な柱であったことは言うまでもございません。生前のご厚情に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。



敬神崇祖は日本人の心

射水神社奉賛会会長 綿貫 武

昔から神を敬い、祖先を崇めるというのが、日本人の心でありました。それは私達の祖先が神代から、連綿として培い築き上げて来た歴史であり文化でありました。

それが先の戦争により僅か四〇五十年にして、歴史も文化もはぎ取られ、何もかも日本が悪いということにされてしまいました。そして歴史を剥奪された為に我々日本人の中にも、それが本当だと思いつく者まで出るようになってしまったのです。

これはとんでもない事であります。仮にそれが本当だとしても、八世紀から二十世紀までの永き間、白色人種である西洋人が、アジアの有色人種を植民地と位置づけ、勝手に居座ることなどは、何と解釈すれば良いのでしょうか。またそれらの国々が「悪う御座いました」と詫びているという法を私は聞いたことがありません。

なぜ日本だけが宰相が替わるたび頭を下げて歩かねばならないのでしょうか。

民間人を無数に殺戮し、しかも有色人種であるとの故をもって二発にも及ぶ原子爆弾投下の如きは許しがたき野蛮行為であります。明らかに国際法に反する「東京裁判」という蛮行を繰り返しながら、マッカーサーの本国への報告「私は間違っていた、あの戦争は日本の自衛戦争であった」との告白は闇に葬られてゆくのであります。

日本を歴史に根ざした「神国」に戻す努力を怠るわけにはいきません。



平成十七年九月十六日のご縁
日を中心に「式年大祭」が執行さ
れました。
ご協力各位のご恩に深謝する
と同時に、「写真アラカルト」と
題し、式年大祭の経過報告を行
います。



射水神社
式年大祭
写真アラカルト



高岡市護国神社のご神前では、我が町の平穏を
ともに守り続けてきた神々の対面がありました。



大勢の方々の歓迎に会い「げんだい獅子」の
先導に続き、二上射水神社を後にする御輿



大勢の崇敬者のご助力により、恙なく還御を
ご奉仕することができました。



高岡市商工会議所ビル前では、高岡市内の産業発展が、
商工会議所関係の皆様へ祈願されました。



稚児社参では、童男・童女約五百人の奉仕をいただき、隊列はなんと千人以上に



式年大祭にて神社庁幣帛をかつくなど、熱心な崇敬者のご奉仕に支えられ式年大祭が始まりました。



地元民謡「やがえふ」(銅器産業の作業歌)の奉納は、町衆の心意気を伝えてくれました。



富山県神社庁長による献幣をうけ、神社庁幣をご神前に供えました。



華麗に勇壮に！
南砺市にて活躍する「巴太鼓」のご奉納



祭典では、巫女舞の他宝生流による仕舞が披露され、祭儀に大輪の花をそえました。

正月雑感

天地万物の自然や人も、四季の移ろいに従って一年のサイクルで廻り繰り返される。我が国では歳末ともなれば、御節料理仕度、買出し、新たな年神を迎えるために、家中を大掃除、門松を立て注連縄を張り巡らし、一家総出での大忙し、ようやく年の瀬を迎え除夜の鐘を聞きつつ床につき、鏡餅や正月縁起物の蓬莱をお供し、一夜明けの新しい年の初め、その形態は地方々の文化によつて多彩であるが、正月を一年の最も重要な節目とみなし、神社・神棚・祖霊舎に手を併せ、行く年の災厄を祓い、来る年の幸を願う風習をもつ国柄である。

正月を迎えると、思い出すのが次の句である。

元日や一系の天子富士の山

内藤鳴雪

この句は、戦前の句であるが、床の間にこの句を飾り、万世一系の皇室を称え、家長が正面、後に家族全員が居並び、お屠蘇や雑煮などで新春を寿ぐ様子を句に表現したものである。このように節目々の家庭の祭りの中に、一年の家内安全を祈り、一家団欒の家族の絆を感じたものである。

昨今、家族制度がもろくも崩壊し

元日を白く寒しと昼寝なり

西東三鬼

この句のように家族一人々行動を違にし、年末ともなると子供は海外・スキーに出かけ正月に居ない。正月の祝日を単なる休日的感覚で、新春を寿

ぐ家庭の祭りは省略された正月、年賀廻りも省略した元旦は寝るよりほかにない現代の世相を反映した句である。

戦後六十年が過ぎ、昨今の日本の社会状況はあらゆる技術が進歩し、経済の繁栄をもたらし便利な世の中になり、一見快適な生活に見えるが、その反面家族の絆を弱め、思いも因らぬ事件が毎日のように報道されています。あらゆる技術の進歩が家庭に普及し、物理的に人が一人で生きていけることを可能にし、自分しか見えない利己主義・個人主義がこの様な事件を引き起こす要因の一つではないだろうか。

人は物質的には一人では生きていけそうに見えるが、決して生きていけないのであり、人のお陰によつて生かされているのであります。人と人との関わりの中には必ず人としての規範が存在します。その規範は躰によつて、躰は家族の絆によつて育まれるものであります。日本には世界に類を見ない四季折々の自然環境に恵まれた国であります。この恵まれた自然の中に培われた日本の文化は、自然の恵みに感謝し、時には自然に畏敬の念を捧げ、祭事によつて表現し、人の生き様を育み生活の中に生き続けて来たのであります。自然を畏敬し罰が当るといふ幼児にも判る抑止力が、近代技術文明にない抑止力が躰の根本を担ってきたのであります。

躰や心の教育は、家庭内や地域社会によつて養われるのであります。今の日本では地域社会では望むべく状況になく、義務教育に委ねているようであるが、無理なことであります。

今一度、先人の育んできた節目節目の家庭の祭・地域の祭事を通し、人と人との連帯感を養い絆を深める事こそ、心の教育でないでしょうか。



(写真提供／富士山本宮浅間大社)

平成十八年 祭典のご案内

節分豆打ち 奉仕者募集

平成十八年二月三日午後三時より射水神社におきまして、節分祭を執行致します。つきましては、厄年・還暦のご祈祷を当社にてお受けされました方より男女各五名豆打ちの奉仕者を募集いたします。ご希望されます方は、一月二十日（金）まで射水神社社務所へご連絡下さい。

●問い合わせ
(0766) 221-3204

厄年祓

【本厄】

四十二歳	男	昭和四十年生
三十七歳	女	昭和四十五年
三十三歳	女	昭和四十九年生
二十五歳	男	昭和五十七年生
十九歳	女	昭和六十三年生

【前厄】

四十一歳	男	昭和四十一年生
三十二歳	女	昭和五十年生
二十四歳	男	昭和五十八年生
十八歳	女	平成元年生

【後厄】

四十三歳	男	昭和三十九年生
三十四歳	女	昭和四十八年生
二十六歳	男	昭和五十六年生
二十歳	女	昭和六十二年生

祝事（男女）

かんれき 還暦

六十一歳
昭和二十一年生

こき 古稀

七十歳
昭和十二年生

きじゆ 喜寿

七十七歳
昭和五年生

さんじゆ 傘寿

八十歳
昭和二年生

べいじゆ 米寿

八十八歳
大正八年生



杜の景色

杜の景色（上半期）

1月1日 歳旦祭 初詣

1月14日 左義長
（射水の火祭）

2月節分 節分祭

2月11日 紀元祭

2月17日 祈年祭

4月18日 日吉社春祭

4月23日 春季例祭

4月29日 植樹祭

4月30日 院内社春祭

5月13日 悪王子社春祭

6月27日 鎮火祭

6月30日 夏越大祓

人形清祓式

「夏越の大祓」

本年も恒例により、六月三十日夕日の候、夏越の大祓が約百五十人の参列の中執り行われました。特に定着をした感のある「人形清祓式」は、日々の生活の中、諸般の理由でやむを得ず処分することとなった人形やぬいぐるみ等に、感謝の誠を捧げ、別れを告げる年に一度の機会とあって、多数の人形が本年も集まりました。以前までは所謂「どんど焼き」など神札・御守類を焼納するべき浄火の中、ぬいぐるみが投げ込まれる姿が数多く見られましたが、信仰上は勿論、地球環境なども勘案して、好ましい状況ではないとの判断から、毎年行なっているものです。



「明治祭」

国民の祝日「文化の日」として十一月三日はよく知られておりますが、本来は我が国が近代化を果たす上において、国民とともに力を尽くされた、明治天皇の威徳に思いをいたす日であります。当日は七五三詣のため、多数崇敬の皆様がお待ちになられておりましたが、事の次第をご説明申し上げ、祭典執行のためご協力を要請いたしましたところ、初めて聞いた話という面持ちの方が多数ではありましたが、概ね趣旨ご理解の上、快く数十分にわたる祭儀の間、控え室にてお待ちいただくことが出来ました。



「七五三詣」

「神社の境内で子供が遊ぶ姿を見ることがなくなつた」と言われる昨今ですが、本年も十一月を中心に参詣される七五三詣は、昨年同様のご参拝を戴き、土曜・日曜などには元気の良い子供達のお力添えをいただき、活気ある境内となりました。また第六回目を数える「七五三宮参り写真コンテスト」（富山青葉会主催）も定着した感を見せ、数多くの出品作品をいただきました。

〈コンテスト17年優秀作品〉



社務日誌

六月

- 二日 宮司富山市日枝神社例祭参列
- 七日 大和月次祭 祢宜奉仕
- 九日 炭谷権祢宜、富山支部主催ハワイ慰霊旅行参加
- 十六日 炭谷 清水権祢宜、神青研修旅行参加
- 二十一日 宮司、責任役員北村良計氏葬儀参列
- 二十二日 炭谷権祢宜、北陸地区祭式講習会参加
- 二十七日 鎮火祭並びに陛下サイパン渡航安全祈願祭
- 二十八日 奉賛会理事会開催
- 三十日 夏越大祓
- 三日 プライダルフェア開催
- 五日 宮司、藤井庁長特急昇進祝賀会参加
- 七日 宮司、神社庁協議委員会出席
- 八日 大和月次祭、宮司奉仕
- 十日 悪王子社例祭、宮司、武内出仕奉仕
- 十六日 清水権祢宜、書道展審査会出席
- 十八日 式年大祭について、二上射水神社総代と打ち合わせ
- 二十二日 滋賀県神社庁東浅井支部神職会参拝
- 二十四日 神社庁雅楽部研修会出席のため、祢宜、炭谷、清水両権祢宜出席
- 二十六日 奉納書道展表彰式
- 三十一日 高岡新湊支部総代会、神職会開催
- ・ 奥護国神社総戦六十周年記念大祭へ祢宜、炭谷、清水両権祢宜奉仕

八月

- 一日 宮司、奥護国神社奉幣大祭参列
- 二日 埼玉氷川神社山田宮司他三名参拝
- 三日 浦安の舞講習会地子石丸巫女参加
- 四日 式年大祭奉仕者打合会開催
- 六日 炭谷権祢宜「お宮を描く」写生大会審査会出席
- 七日 二支部合同祭式研修会開催
- 八日 大和月次祭、宮司奉仕
- 十六日 青年相撲土俵祭、祢宜、武内出仕奉仕
- 十八日 奉賛会理事会開催
- 二十日 炭谷権祢宜、写生大会表彰式出席
- ・ 新潟奥護国神社プライダルフェア見学
- 宮司、今村、石田事務参加
- 二十六日 清水権祢宜武内出仕神社研修会参加
- ・ 諏訪社秋季例祭、宮司、炭谷権祢宜奉仕
- 二十七日 清水権祢宜、神社庁総会
- 二日 明治神宮崇敬会、富山地区大会へ宮司、祢宜、炭谷権祢宜参加
- 三日 明治神宮権宮司中島精太郎氏参拝
- 四日 プチプライダルフェア開催
- 七日 射水協賛会会合式年大祭奉仕者打合会交通規制打ち合わせ
- 九日 大和月次祭、宮司奉仕
- 十一日 稚児社参拝打合会
- 十三日 宮司、高瀬神社例祭参列
- 十四日 御輿遷霊祭斎行
- 十五日 式年大祭記念御輿渡御祭
- 十六日 式年大祭
- 十七日 式年大祭記念、稚児社参賑行事（民謡やかえ心、巴太鼓）

九月

- 十八日 式年大祭後日祭
- ・ 富山市奥田神社氏子参拝
- 二十一日 神社庁教化委員会全体会議
- ・ 富山青葉会七五三打合会へ宮司、祢宜、炭谷権祢宜参加
- 二十四日 清水権祢宜、神社本庁教学生研究生中間報告のため、神社本庁出向
- ・ 院内社秋季例祭、祢宜奉仕
- 二十六日 日吉社秋季例祭、宮司、武内出仕奉仕
- 二十七日 院友神職会開催
- 八日 大和月次祭、祢宜奉仕
- 十五日 炭谷権祢宜、神宮初穂茂参加のため伊勢出向
- 十七日 神嘗祭当日祭斎行
- 十八日 高岡市護国神社秋季大祭前日祭
- 十九日 高岡市護国神社秋季例大祭
- 二十日 高岡市護国神社秋季例大祭後日祭
- 二十四日 宮司、奉賛会長渡辺辰男氏葬儀参列
- 二十八日 立正佼正会高岡教会高陵支部参拝
- 三日 明治祭斎行
- 七日 奉賛会役員会
- 八日 大和月次祭宮司奉仕
- 十五日 富山青葉会七五三反省会のため、宮司、清水権祢宜武内出仕富山市出向
- 十六日 高岡新湊支部新穀感謝祭参加のため、宮司、炭谷権祢宜伊勢出向
- 二十三日 新嘗祭斎行

十月

- 一日 朔日祭
- 十五日 あけほの敬神講参拝
- 二十三日 あけほの敬神講参拝
- ・ 月次祭

※毎月の行事

人事

新任

巫女 石橋由佳理
平成一七年十月一日

射水神社奉賛会

会長 綿貫 武
副会長 寺嶋 敏夫
副会長 谷道 巖
平成一七年十一月七日

退任

巫女 北 久美子
平成一七年九月三十日

越中の食彩 宮一宮正興

冬の味「かぶら寿し」

日本最古の「漬け物」形状はハンバーガー的。「かぶら」のパンに「ブリの切身」という肉を挟む。琵琶湖周辺に伝わる「鮒(ふなずし)をはじめ、全国各地には地元で根ざした「なれずし」(魚介類を主原料としたご飯を用いて乳酸発酵させた保存食品)がいろいろありますが、富山にも「なれずし」の一種とされる、御存知「かぶら寿し」があります。この「かぶら寿し」はもともと加賀藩後期に「漁師が豊漁と安全を祈って正月の儀式(起舟)の馳走として出した」とか「前田の殿様が深谷温泉に湯治にこられた時の料理に出された」とか、いろんな言い伝えがあるようですが、記録としては「金沢市史」(風俗編)に宝暦七年(一七五七)十代藩主重教の頃、中流家庭の年賀の客をもてなす料理として「なまこ(このわた、かぶら酢(すし))」とある。北陸に今も残る古代寿し。現在でも各家庭では時期になると盛んに「かぶら寿し」を漬けて、互いに味自慢をしています。それゆえに各お店やご家庭で、さまざまな味が堪能できます。又、同じ方が作ったものでも食べるタイミングで微



妙に味が違ってきます。 「かぶら寿し」は、お隣り石川県金沢が発祥名産の地となっておりますが、富山にも深い関連があります。毎年冬將軍も近づくこの時期「ブリ起こし」と言われる雷が荒れ狂いブリ漁が始まります。中でも富山湾は、寒ブリの都と称し名産地です。 日本海の荒波にもまれ、脂の乗った寒ブリを使ったものが「かぶら寿し」となって、今現在も年末・年始には欠かせない冬の味となっております。

ご結婚おめでとうございます。

御神恩をいただき、幸おおからん事を。

6月

山口裕樹・恵子
浦田勝齊・琴乃
山崎宏・育美
窪田慎一・里美
岡田俊輔・菜奈
吉田秀樹・聡美
大井正人・祐子
上木和典・晶子
早崎彰謙・淳子
飯田黒将夫・愛子
石黒将夫・幸子

7月

河合勇・美賀子
立浪大樹・育代子
村井忠司・慶子

9月

竹部和彦・絵理香
松尾淳一・祐佳
山本貴禎・智美

伏江義信・カティア
八田雄司・恵子
柴田端芳・穂さやか
中山大芳・紀春美
中山大介・千恵

10月

新家誠・智恵美
江口晋一・酒井麻美子
沢幸治・智美子
山田為久・享子
池上顕弘・涼子
高橋文夫・優子
中川孝志・ユキ子
大石一慶・晶子
山田陽一郎・恭子
橋場祥晶・恵美子
竹田村政・聡一
中野野繁・真之
新森英二・智博
角田将之・由香里

酒井秀雅・明・信子
塩津雅憲・憲・芳恵
長高大地・地・真澄
村高弘彦・弘・真樹
竹内哲也・也・真美
原泰之・之・啓子

11月

松本裕也・有紀
浅谷政克・尚美
齊勝直也・和泉
小笠原敏記・昌子
明地良浩・雅美
浜谷卓也・容子
高田浩司・三恵
中市川勇匠・幸子
能作山作哲朗・伊希
小直直広・倫香
直幸恵

平成 17 年 6 月～平成 17 年 11 月迄

『ふるさと 射水神社』

⑤山の神・水の神の「二上山」

越中の国ほど天恵によって豊穰な国はない。射水郷は二上山の山系に自然の丘陵地帯と射水川の水恵とによって生じた越中文化の発祥地である。我々の祖先は常に天地自然の神々に畏敬の念をもつて接し、神々と共に生活し発展していったのである。

雲上高き天津御空、波上遙かな綿津見、或いは清流称える河川に神々の坐す信仰が生活の奥深くに根を下ろしていることは、脈々と現在に伝わっている。すなわち、水が生活の糧であり産業の根源であることに変わりはない。射水川は二上山の裾を廻って富山湾に注ぐ現在の小矢部川であり、飛越国境（岐阜県・富山県）に源を発して、西部山麓に沿って北流し、水勢も比較的ゆるやかで、河口は伏木港になっている。その東を流れる庄川は、飛驒の山中深くに源を発して国境の山を横断し、日本海に流れついている。この両川は古来度々流路を変えながら、何処かで合流したものであり、射水川という川名はこの両川の合流点から下流を呼んだ

ものであった。両川が一本になった射水川の雄大さは、とても今の小矢部川の非でなかったのではないかととうたる水勢と広漠たる川幅は想像もできない。春から夏にかけて飛越国境の山々の雪がとけ、その上、豪雨の伴う気象はたちまち水量を増し、穏やかな巨川も怒涛の狂川となったであろう。射水川を灌漑と用水に利用することで、田畑の豊穰を神の天恵と畏みながらも、洪水の頻発で田畑を破壊されることもあり、射水神の大前に治水を祈り、早魃の際には「天真名井」に詣でて降雨を祈ったことであろう。

このように部落の生活と共にある射水川の神霊を農耕治水の神と崇め祀ったのである。二上射水神社の「天真名井」は現在、水が止まっておりその中心に御幣が立ち、周囲約二メートルの柵で囲んであるだけであるが、百数十年までは、こんなと水が湧いていた。土地の人々は射水川の水路から湧き出る水に、神が憑依されるという信仰を根源として、射水神の坐す「忌水（いみず）」と称し、古来天真名井を崇めていた。社名、郡名、川名の「射水」とこの「忌水」は深い関係があると思われる。水があつて山野が潤い豊穰な田地が増え又、山の積雪がとけて川の水となることは天地自然の法則であるが、そこに人々神々への感謝、信仰が生ま

れる。すなわち、山と川は表裏一体の関係で、山あつての川であり、川あつての山である。山の神霊「二上神」と川の神霊「射水神」の二神は同じ神霊であるという信仰をもつた二上山を中心とした民族は、恵まれた生活環境とこの信仰を支えとして、越中文化発祥の根源と基盤を造つたのである。射水神社の御祭神の御神徳は、農耕治水の神と尊び崇めたが、農耕治水はあらゆる産業の源であるから、産業生成の神を祀るとしてもよいのである。



△元宮二上射水神社

編集後記

平

平成十七年九月、神慮を畏みつつ、盛大に式年大祭が挙行されました。これも偏にご協力をいただきました。関係各位のご助力に寄ることと思つた次第でございます。尚、当社では平成十八年、拜殿の拡張工事を予定しております。平成十七年に引き続き、何卒ご協力の程よろしくお願い致します。

表

紙の写真は、高岡市内の雨晴海岸から望む、立山連峰の写真でございます。富山湾は言わずと知れた、海の幸の宝庫であり、三千メートル級の山々から直下し海へ注ぐ水は、良質なブランドトンを育み、ひいては豊かな文化をも育むものであると考えます。この様なシステムとしての自然を視野に入れ、我が国が自然に神を見だし、敬い守り続けてきたとは言いきれませんが、少なくとも自然との共存をはたしてきた先人の知恵は、正しく後世に伝えるべき文化であり財産であると思います。当社報の「越中の食彩」連載の意図もその様な思いから発信しております。

発行 射水神社

発行所 〒九三三〇〇四四
高岡市古城一―

TEL (〇七六六) 二二一三三〇四

FAX (〇七六六) 二二一三七一五

印刷所 キクラ印刷株式会社

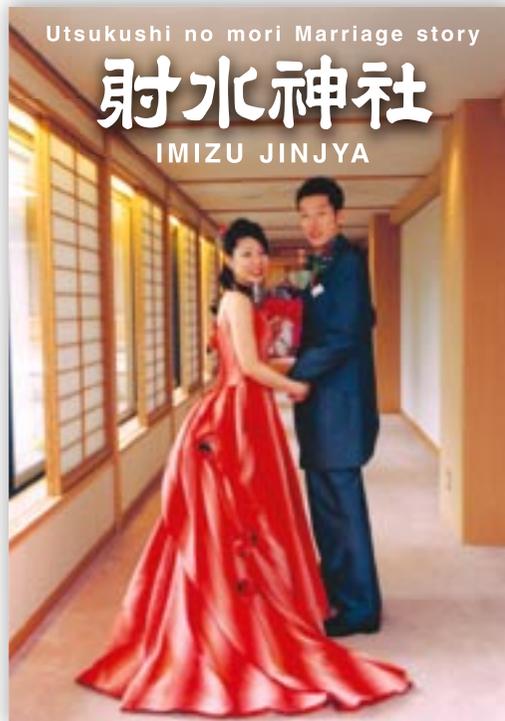
参集殿通信 「手水の儀」

「手水舎」で身を潔めるお二人。
神前へ向かう前には必ず手と口をすすぎ身を潔める「手水の儀」を行います。



緑豊かな古城の杜、八百万（やおよろず）の神々に見守られての結婚式の始まりです。

—うつくしの杜ブライダルフェアのご案内—



平成 17 年 4 月 挙式 金田様ご夫妻

ブライダルフェア

平成 18 年 2 月 19 日 (日) 12:00 ~ 19:00
模擬挙式 / 模擬披露宴 / 会場コーディネート展示
婚礼料理試食会 / ケーキ試食

プチブライダルフェア (予定)

平成 18 年 4 月 2 日 (日) 10:00 ~ 19:00
模擬挙式 / トワイライトウエディング
会場コーディネート展示 / ケーキ試食

うつくしの杜、結婚式場

射水神社

〒933-0044 高岡市古城 1 番 1 号 (高岡古城公園内)

お問合せ
(0766) **22-0808**

U R L ■ <http://www.imizujinja.or.jp>

Eメール ■ jinja-k@mbs.sphere.ne.jp